

妙本寺本『曾我物語』と内閣文庫蔵『源平闘諍録』とに於ける

訓読語の共通性・差異性について

橋村 勝明

一、はじめに

従来、妙本寺本『曾我物語』と四部合戦状本『平家物語』・『神道集』との関係については、先学によって指摘されてきたところである。^① 私にも訓読法の観点から、それらの資料に特徴的に見出せる訓が存することを指摘した。^③ そして、実字訓について総体的に検討するべく、『曾我物語』を中心として書写年と同年代の古辞書とを比較した。^④ しかし、辞書の記述のみを比較の対象とするのではなく、より広い範囲での比較が必要であると考ええる。

そこで本稿では、様々な資料との比較を行っていく一階梯として資料を限定し、その二本間の訓読の差異性と共通性について考えることとする。その際に、推定による訓読語を排除するために、検索対象を訓読語の語形が確定できる全訓付訓語に限ることとした。比較の対象とする資料は、

先に検討した妙本寺本『曾我物語』（以下『曾我物語』）と、内閣文庫蔵『源平闘諍録』（以下『源平闘諍録』）とする。これは、『曾我物語』・『神道集』・四部合戦状本『平家物語』に共通して見られた訓読上の特徴が、『源平闘諍録』にも見いだせるのか、という点について検討するためである。

二、『曾我物語』と『源平闘諍録』とに於ける全訓付訓語の比較

『源平闘諍録』は、内閣文庫に所蔵される本で、『曾我物語』と同じくヲコト点と仮名点によってその訓読を表示している。仮名によって全訓と考えられる訓読を付した用例も少なからず見受けられ、その訓読法的一端を垣間見ることが出来る。そこで、訓が比較的確定できる全訓付訓語について、『曾我物語』^⑤と『源平闘諍録』^⑥とを比較するこ

とする。比較の視点としては、訓読語の差異と用字の差異についてである。

二資料を比較して得られる訓読語と用字との関係については、以下の四通りを想定することが出来る。

- ① 同訓同漢字
- ② 同訓異漢字
- ③ 異訓同漢字
- ④ 異訓異漢字

この四通りのうち④については、例えその意味に重なりがみられたとしても、ここでは検討外とする。ここに分類される用例は、『曾我物語』、『源平闘諍録』それぞれの資料に特有の漢字、特有の訓を有する用例ということになり、それらを集積するとそれぞれの特徴が描き出せるものと考えるが、本稿では重なりを中心に検討することとするので、④を検討の対象外とするのである。

『源平闘諍録』に見られる全訓付訓例は、延べ五七三例である。それらのうち、『曾我物語』と同訓同漢字の用例は、以下に掲げる通りである。

① 同訓同漢字⁽⁷⁾

	曾我物語	源平闘諍録
オハス(御)	1	1
コ、(此)	1	2
コトサラ(故)	1	2
ス(為)	1	7
ス(不)	2	1
ソコ(其)	1	2
タケシ(武)	1	1
タノム(侍)	1	1
ナトカ(何)	1	1 (ナシカ)
ナラフ(雙)	1	1
ハク(矯)	1	1
マシ(不)	15	10
マホル(瞻)	1	1
ヨソ(外)	1	1

この表①に示される用例は、漢字と訓とが極めて緊密に結びついているものと考えられるが、それが真名本という資料的な標準であるのか、或いは中世(室町時代)という時代的な標準であるのか、という部分が問題となってくる。

次に、同訓異漢字の表を掲げる。異なる漢字を同様に訓

読している用例である。表にはまず共通する訓を掲げ、それぞれの資料でいかなる漢字が同様に訓まれているのかを示した。

②同訓異漢字⁽⁸⁾

	曾我物語	源平闘諍録
アサケル	哂	笑
アタナリ	浮	空
アヤシ	恠傍	奇(2例)
イチハヤク	渴焉	掲沛艾
イトナミ	営	務
イミシ	嚴	最見
イロウ	諂	綺
オハス	御(4例)	御坐(2例)
カク	浴	扶
クラフ	比	並、校
サク	藪	開
サラハ	而	然
ツナク	櫟	縹、維
ト、ム	認	駭
トナフ	嚕	唱
ナクサム	呼	慰

ノク	退(2例)	除
ハサム	按	鈇
ハツ	了(2例)	終(2例)
マキル	綜	紛
ヤカテ	則	応、即
ヤ	哉	耶
ユルス	許	宥
ヲカシ	鳴借	哽、嗚呼
ヲコカマシ	鳴借	嗚呼
ヲホロケニ	刈	少少
ヲメク	喚	謳(3例)

訓読の問題であるとともに、既に訓読語を二資料の間で同一のものとして想定していたのだとすれば、用字の問題であるとも理解できる。ある語を想定したときに、用いられる漢字としてより標準的であったのは、『源平闘諍録』に記される方であったのか、或いは『曾我物語』の方であったのか、ということが問題となろう。

異なる漢字を同様に訓読していることの背後には、例えばそれぞれの語の意味が異なることが、考えられよう。次に、同じ漢字に対して異なる訓を宛てている例について、次の表で示した。

③異訓同漢字⁽⁹⁾

何	少	強	忝	此	浮	爾	長	隱	雜	雙	顔
ナトカ ナニトモ	ヲソナシ(2例)	ツヨシ	カタジケナシ	コ、	アタナリ	シカラハ	タケ	カクル	サツト	ツルヘ	マミユ
イカニシテ イカニ ナシカハ ナト ^(マ) ンヲ ナンム ナント	スコシ	アナカチニ	マシハル	カ、ル(2例) カクテ コハ カウ カク	ウカル	トニモ サソトヨ	ヲトナシ	クモル	マス	ナラフ	カラ

③については、一つの漢字に対して多くの訓が存在することは当然の結果であるが、より緊密に結びついていたのは何れの訓であるか、或いは、複数訓あるもので、古辞書が規定する訓に添っているかどうかということも問題となろう。以上の三種の表を手がかりとして、真名本に用いられる漢字は時代的標準によるものであるのか、或いは資料的標準によるものであるのか、ということについて次節で検討を進めてゆく。

三、真名本的標準の訓と個別的な訓について

時代的標準、或いは資料的標準ということを求めるためには、様々な時代のあらゆる資料についてそれぞれの標準を求め、そのなかに特定の時代、特定の資料を位置づけてゆく方法が最も妥当であると考ええる。しかし、その検討すべき資料は膨大なものとなり、直ちに結論が得られるものではない。そこで、本稿ではここで取り上げた二資料を中世後半期成立のものであるとして、その時代の標準或いは規範とされる辞書について、その漢字と訓との関係を調べることによって、資料的標準について見当を付けることとしたい。

検討対象とする古辞書は、『古本節用集』⁽¹⁰⁾、妙本寺蔵『いろは字』⁽¹¹⁾、『倭玉篇』五本(拾篇集・玉篇略・米澤文庫本倭

玉篇・弘治二年本倭玉篇・玉篇要略集⁽¹²⁾とする。又、時代的には相当遡ることとなるが、『類聚名義抄』五本⁽¹³⁾（観智院本・蓮成院本・高山寺本・西念寺本・図書寮本）についても確認しておくこととする。これは、同時代の辞書に掲載されていないことが同時代に使用されていないということには必ずしもならず、先の時代に確認できるものについては時代が降っても使用された可能性をも視野に入れようとするためである。

右に掲げた辞書を検索対象として先に掲げた①②③について掲載の有無を調べたところ、以下の表の如き結果を得た。それぞれについて考察することとする。

①同訓同漢字⁽¹⁴⁾

	掲載辞書
オハス（御）	
コ、（此）	観本（ココニ）・玉篇略
コトサラ（故）	いろは・観本（コトサラニ）・蓮本（コトサラニ）
ス（為）	観本
ス（不）	
ソコ（其）	
タケシ（武）	黒本・易林・拾篇集・玉篇略・米澤本・弘治二年本・玉篇要・観本・蓮本

タノム（侍）	拾篇集・玉篇略・米澤本・弘治二年本・玉篇要・観本
ナトカ（何）	
ナラフ（雙）	易林・明応・いろは・拾篇集・玉篇略・米澤本・弘治二年本・玉篇要・観本
ハク（矯）	伊京
マシ（不）	観本・蓮本
マホル（瞻）	いろは・弘治二年本・観本・蓮本・高本
ヨソ（外）	

全一四語について検索したところ、その内九語については古辞書に見出せた。掲載されていなかったのは、

オハス（御）・ス（不）・ソコ（其）・ナトカ（何）・ヨソ（外）の五語である。これらは、古辞書に掲載されていなかったことで、直ちに真名本独自の用字法であるとは断定できない。例えば、「不」「其」などは、極めて使用率が高く殊更辞書に掲載しなくても訓める漢字であったろう。従って、大凡二資料に共通して見出される同字同訓の用例は、中世当時の標準的な訓みかたであったと考える。

次に、同訓異漢字の関係にある用例についての表を掲げる。表中網掛けを施した漢字は、『曾我物語』の漢字であること、網掛けのないものが『源平闘諍録』の漢字であることを示す。

②同訓異漢字⁽¹⁵⁾

訓読語		漢字	掲載古辞書
アサケル		咲	明応・黒本・易林・拾篇集・玉篇略・米澤本・観本・蓮本・高本
アタナリ		笑	
アヤシ		空	
イチハヤク		浮	
イトナム		恠	いろは・玉篇要
イミシ		奇	玉篇略・弘治二年本
イロウ		掲沛艾	
オハス		湯焉	
		營	伊京・明応・饅頭・黒本・易林・拾篇集・観本
		務	
		最見	
		嚴	
		談	
		綺	易林(綺)・玉篇略・米澤本・玉篇要・観本(綺)
		御	
		御坐	易林・饅頭・黒本(御座)

カク		浴	
クラフ		扶	
サク		比	明応
サラハ		並	
ツナク		校	
ト、ム		藪	
トナフ		開	饅頭・黒本・易林
ナクサム		而	
		然	いろは(然者)・観本(然者)
		樸	
		縹	易林・拾篇集・観本
		維	明応・黒本・米澤本・観本
		認	
		駭	
		嚼	
		唱	易林・饅頭・拾篇集・玉篇略・観本・蓮本・高本
		呼	
		慰	饅頭・黒本・易林・明応・拾篇集・玉篇略・米澤本・弘治二年本・玉篇要

ノク	退	饅頭・易林
ハサム	除	黒本・伊京・玉篇略（ノクル）
ハツ	校	拾篇集
マキル	鋏	拾篇集
ヤ	了	明応・黒本・いろは
ヤカテ	終	黒本・饅頭・いろは・米澤本（マキルル）
ユルス	紛	米澤本・観本・蓮本
ヲカシ	綜	いろは
ヲコカマシ	哉	明應・黒本・易林・いろは・観本・蓮本
	耶	弘治二年本・観本
	即	饅頭・黒本
	應	
	則	
	許	
	有	
	哽	
	鳴呼	
	鳴借	
	鳴呼	
	易林・いろは	

ヲホロケナリ	刊	拾篇集（少）・観本（オボロケ）・蓮本（オホロケ）
ヲメク	少	
	喚	饅頭・黒本
	謳	

右表より全体を、

i 曾我物語・源平闘諍録の両方に

古辞書の記述による根拠がある用字

(4)

ii 曾我物語のみに

古辞書の記述による根拠がある用字

(7)

iii 源平闘諍録のみに

古辞書の記述による根拠がある用字

(11)

iv 曾我物語・源平闘諍録の両方に

古辞書の記述による根拠がない用字

(5)

の四つに分類することが出来る。なお、その分類に属する漢字と訓との組み合わせ数を（ ）内に記した。

『曾我物語』・『源平闘諍録』の両方に古辞書の記述による根拠がある用字の用例（i）については、一つの語に対して複数の漢字を当てることの出来る極めて一般的な語で

あると考えられる。一方、『曾我物語』・『源平闘諍録』の両方において古辞書の記述による根拠がない用例 (iv) については、両資料において、訓と漢字の結びつき上の共通性はないながらも、訓と漢字の如き個別的な共通性ではなく、例えば真名本という資料的な性質上の共通性が指摘できるのかもしれない。そして、いずれか一方のみに古辞書の記述による根拠がみられる用例 (ii、iii) は、それぞれの資料が持つ特有の漢字と訓との結びつきであると考えられる。従って、数字上『曾我物語』が七例、『源平闘諍録』が一一例となっており、『曾我物語』の方が根拠のある組み合わせが少ないことがわかる。これは、『源平闘諍録』に対して『曾我物語』の方が、その時代にあつて特有の漢字と訓との結びつきを有していることを窺わせる。⁽¹⁶⁾

しかし、このことについては更に詳細な検討を要するものと考えている。後考に譲りたい。⁽¹⁷⁾

次に、同訓異漢字の関係にある用例の表を掲げる。表中網掛けを施した語は、『曾我物語』のものであることを示す。

③ 異訓同漢字⁽¹⁷⁾

漢字	訓読語	掲載古辞書
何	ナトカ ナニトモ	

少	強	忝	此
イカニシテ イカニ ナシカハ ナト ^マ ンヲ ナンム ナント	ヲソナシ スコシ	ツヨシ アナカチ	カタシケナシ マシハル コ、 カ、ル カクテ コハ
観本	観 (ヲサナシ) 伊京 (少間・スコシバカリ)・米澤本 (スコシキ)・観本	易林・拾篇集・玉篇略・米澤本・玉篇要・観本 伊京・饅頭・黒本・明応・易林・拾篇集・米澤本・玉篇要・観本	易林・玉篇略・弘治二年本・観本 (カタシケナク) 玉篇略

顔	雙	雜	隠	長	爾	浮	
カホ マミユ	ナラフ	ツルヘ	マスル	サツト	クモル	カクル	フトナシ
タケ	トニモ	サソトヨ	シカラハ	ウカル	アタナリ	カク	カウ
明応・饅頭・黒本・易林 ・観本							
易林（浮岩・ウカル、）							
玉篇略・米澤本							
明応・易林・拾篇集・玉 篇略・米澤本・弘治二年 本・玉篇要・観本							
饅頭・明応・易林・玉篇 要・観本							

一つの漢字が複数の訓を有することは、各種古辞書を一見すれば容易に知ることが出来る。従つて、一つの漢字に複数の訓が存し、かつ古辞書によつて根拠が確認できる漢字については、取り立てて問題とはしない。検討の必要があるのは、古辞書に掲載されていない訓を有する用例である。それらについては、真名本の資料的な性格と絡み合わせて考える必要がある。

『曾我物語』・『源平闘諍録』の両資料共に古辞書掲載の訓が見えない漢字は、

爾

の一字である。

「爾」の用例

○若爾シカラは文學上はツ、都申にて院宣を奉らむとケレは語 佐殿聞て食此由を
喜サナンとは事愚耶深被キケル為をソ二約束一

（曾我物語・卷三・二一ウ）

○法一皇ノ入一御実ニ雖有ニ其畏ニ爾トニモニモ爾有ニハコソ被思食之
旨一ノ加一様有ニ風一聞一

（源平闘諍録・卷一之上二三）

○小松殿違御中御坐覚レ悪侯申爾サントヨ誰思レ然

（源平闘諍録・卷一之下七七）

これらについては、管見の限りでは『曾我物語』・『源平

『闘諍録』に特有の訓であると考えられるが、即断はできない。この訓読が一回的なものでなく訓読法として資料内部、或いは資料成立に関わる学問環境において確立していたものであるか否かということについて更に検討しなければならぬが、右に掲げた用例が付訓のある用例の全てであるので、より広範囲に検索の対象を広げる必要がある。又、付訓のない用例についても用法より検討する必要がある。後考に譲る。

次に、『曾我物語』に古辞書の記述が見えて、『源平闘諍録』に見えない漢字は、

忝 此 長

の三字であるが、逆に『曾我物語』に古辞書の記述が見えず、『源平闘諍録』に見える漢字は、

雑 雙 顔

の三字である。「雑」については、オノマトペであり、真名本に用いられるような方法に従っているのであって、所謂漢文訓読の際にはこの様な訓が与えられることはない。

右表の結果から、『曾我物語』と『源平闘諍録』とは真名本という資料的な共通性を有しながらも相交わらない訓

をも有しており、傾向として何れかの資料が当時の標準の訓によって構成されているという判断は出来ないであろう。

四、まとめ

『曾我物語』は、日蓮宗との関係が従来より指摘され、東国の成立とされてきた。本稿は、同じく東国成立とされる『源平闘諍録』と比較することによって、『曾我物語』の訓読上の特徴が日蓮宗由来のものであるのか、或いは、更に地域的な枠組みであるところの東国由来のものであるのか、ということについて、その手がかりを得ようとしたものである。

真名本の訓読と用字とについて、俯瞰的に観察すると、『曾我物語』が標準的である、あるいはその逆である、ということとは、傾向としては指摘し得ても、明確には結果として数字上に現れてこないようである。ある訓読語については『曾我物語』が標準であり、又別の語については『源平闘諍録』が標準である、ということである。そして又、ある用字については曾我が古辞書の規範に沿っており、また別の字については『源平闘諍録』が古辞書の規範に沿っているのである。このことは、真名本の訓読と用字とが、あたかも地層の如く同時代的標準と資料的標準とが折り重なって全体を構成していることを示唆しているのではない

だろうか。従って、一見するとそれらが雑然と全体を構成しているように見えるのである。

しかし、個々の訓読及び用字について考察してゆくことによって、その折り重なった地層から時代的標準や資料的標準といったものを発掘するように、それらを再構成することが出来るのではないかと考えている。

今後残された課題としては、個々の訓読語について広く資料を渉猟し、微細な検討を加えてゆくこと、そしてそれらを集積し、全体像を再構成することが挙げられる。又、用字についても同様の方法が考えられる。

注(1) 筑土鈴寛「歴史と伝説―曾我物語成立考―」(『国語と国文学』昭和十八年一月)、山下宏明「源平闘諍録管見―其の成立基盤をめぐって―」(『国語と国文学』昭和三十六年八月)等に指摘が有る。

(2) ここでいう「訓読法」とは、所謂訓点資料に於けるそれとは異なる。真名本は仮名表記を漢字表記に改めたものであると定義すると、予め訓が設定されていることになるが、この点については尚検討が必要であるので、本稿では形式上「訓読語」を用いる。「訓読」「用字」についても同様である。

(3) 拙稿「妙本寺本曾我物語における「則」字訓について」(『国文学攷』一五七号、平成一〇年三月)、拙稿「中世真名本に於ける「而」字の用法と訓について」(『鎌倉

時代語研究』第三輯、平成一一年五月)、拙稿「妙本寺本『曾我物語』の「是」字の用法とその訓について」(『国文学攷』第一六四号、平成一一年一二月)

(4) 拙稿「妙本寺本『曾我物語』の訓読語について―実字訓を視点として―」(『文教国文学』第四四号、平成一二年三月)

(5) 山下宏明編著『源平闘諍録と研究』(未刊国文資料刊行会、昭和三十八年三月)を主として検索し、早川厚一・弓削繁・山下宏明編著『内閣文庫蔵 源平闘諍録』(和泉書院、昭和五五年二月)を参考として使用した。

(6) 山岸徳平・中田祝夫解説『真名本曾我物語』(勉誠社、昭和四九年一〇月)によった。

(7) (一)に示した語は、本文中にその語形で存することを示す。表の見出し語については、終止形を以て掲げることを原則とした。以下の表についても同様である。

(8) 資料欄の(一)内は用例数を示す。用例数の無い語についてはそれぞれ一例であることを示す。

(9) (8)に同じ。

(10) 中田祝夫著『古本節用集六種研究並に総合索引』(風間書房、昭四三年四月)によった。但し、天正一八年本については、影印によって確認できないので、調査対象からは除外した。

(11) 鈴木博著『妙本寺蔵永禄二年いろは字 影印・解説・索引』(清文堂、昭四九年五月)によった。

(12) 北恭昭編『倭玉編五本和訓集成』(汲古書院、平成六年三月)による。なお、表中は紙幅の都合で、それぞれ

拾篇集・玉篇略・米澤本・弘治二年本・玉篇要の略を用いた。

(13) 草川昇『五本対照類聚名義抄和訓集成』(汲古書院、平成一二年一〇月)による。なお、表中は紙幅の都合で、それぞれ観本・蓮本・高本を用いた。西念寺本・図書寮本についても検索したが用例を見出せなかった。

(14) 掲載古辞書欄の(一)内の語は、古辞書に掲出されている語形を示す。

(15) 掲載辞書欄の(一)内は古辞書に於ける掲出漢字を示す。

(16) 表中に見える「ツナク」という語に関して、古本節用集では以下の如き記述が存する。

黒本本 ^{ツナク} 繫 ^{馬舟} (八八・3)、^{ツナク} 維 ^舟 (八八・4)

易林本 縻 ^{ツナク} 縻 ^同 縻 ^同 縻 (二〇七・2)

これらの用例から、何をツナグのかによって漢字を使い分けていることが窺える。表中の他の漢字についても、このように意味的に異なるものが含まれている可能性がある。本稿において一つ一つ用例を検討するべきであるが、言及出来ていない。今後の課題としたい。

(17) 掲載古辞書欄の(一)内の語は、古辞書に掲出されている語形を示す。なお、この表の作成に当たっては、今西浩子編『易林本節用集漢字語彙索引』(和泉書院、平成一二年一月)についても参考にした。

(本学講師)